



河曲地区地域づくり協議会

広報 かわの

令和5年9月20日 第14号

回
覧

宅地&公園造成 急ピッチ 神中跡地 十宮に新しい町

今年10月の工事完成、一般供用開始をめざして、神戸中学校跡地での宅地造成と公園の整備が急ピッチですすすめられています。

整備事業は右上の写真のように、あちこちで見かける平地の造成風景で、完成後は複数の住宅建設業者さんが70戸程の分譲にあたります。

下の写真（6月17日撮影）が今回の造成工事の要所です。この頑丈に造られた鉄筋コンクリートの建屋は、雨水対処のため密閉型にした貯水槽で、地下遊水池の働きをします。ここには2500立方メートル、2500トンの水をためることができます。



コンクリート水槽はこれでほぼ完成形で、このあと全体が土砂で堅固に埋め尽され、整地されてそのうえに公園がつくられます。密閉型になっているのは土中埋設と公園地確保のためです。

都市化にともなう雨水処理という問題を見据え、住宅環境の向上という課題にも対処する最近の地域開発の在り方の一事例、と現場監督の方がおっしゃっていました。（R5.6.22 記）



「暮らしまかせて支援事業」 住民による支え合い活動

鈴鹿市社会福祉協議会

暮らしまかせて支援事業 6月21日に「暮らしまかせて支援事業」を河曲地区でも立ち上げてはどうですか、との打診を兼ねて、地域づくり関係者を対象に鈴鹿市社会福祉協議会による説明会がありました。最近の少子高齢化社会に対処するため、住民による支え合いを、より広範囲に展開させようとの趣旨に発する活動です。

少子化で複式授業 河曲地区に住んでいると危機感を抱くことも少ないかとも思われますが、地域によっては少子化問題は切実です。鈴鹿市南部の合川小学校では、対処策として令和6年度から複式授業を実施する予定になっています。

合川小の場合、来年度は全校児童数が68名のため、6学年5学級になる見込みです。学級数が各学年1学級の6学級体制を満たさない、つまり国の基準で云う「過小規模校」になるため、2年生3年生をまとめて1学級にして授業を「複式」で進める予定です。

合川小の隣、天名小学校も同様で、令和8年度には全66児童5学級となる見込みで、複式授業が不可避となる状況がみえています。

学校統合 合川と天名の児童にとって複式授業

はベストの選択でもベターの選択でもありません。学校にはある程度の数の友達がいる、年度毎にクラス替えがあつて初めて毎日楽しい学校になり学級になります。

こうした状況をふまえ、令和7年度、合川、天名両小学校はその隣にある郡山小学校に統合化の基本方針のもとに現在、その環境整備がすすんでいます。

適正規模校 河曲小学校は令和5年度、児童数439名、15学級です。1学年2～3学級という適正規模が保持できています。この「適正規模校」という教育環境は、人口動態を勘案しても20年後まで見込めます。想定では令和25年の児童数307人、12学級です。

令 5	439 / 15	令 7	431 / 15
令 9	414 / 15	令 11	383 / 14
令 13	393 / 13	令 15	354 / 12
令 17	341 / 12	令 19	334 / 12
令 21	327 / 12	令 23	314 / 12

放課後こども教室 下の写真は河曲のボランティアサポーター15名の皆さんによる6月28日の「河曲放課後こども教室」、通称「河曲キッズクラブ」、愛称「カワッキー」の活動のひとつです。午後2時から玄関前でたなばた飾りを仕上げたあと、生徒たち50名はここへ移って学校の宿題に取り組み始めたところです。赤いユニフォーム姿がサポーターの先生です。

教室開設の目的 この教室は、安心・安全な子どもの活動拠点として体験活動や地域住民との交



流活動を行うことを目的にしています。安心、安全な遊びの場所が確保されていますので、学びも体験活動もできます。

所管は文部科学省ですが、直接は鈴鹿市文化振興課が管轄する社会教育事業の一環で、月2回～4回、毎回2時間程度の活動です。現在、市内では河曲、清和、郡山、白子、明生、井田川の6カ所で教室が運営されています。

河曲の課題 以上をみると河曲の場合、少子化もさることながら、当面对処すべき課題は、高齢化が避けられない地域環境をみんなの協力で、互助や共助で住みよい環境にもっていくこと、と思われま。

老老世帯が6割超 高齢化社会の現状ですが、日本人の平均寿命は男性が81.47歳、女性が87.57歳です。その高齢化率は全国平均：29%、三重県：30.5%、そして鈴鹿市：25.8%（令和5年3月現在）。つまり市内では4人に一人が65歳以上の高齢者です。そして高齢者の住まいのあり方は、単独：28.8%、夫婦のみ：32.3%、3世代：9.4%となっていて、鈴鹿市では（28.8+32.3）6割以上が高齢者の独居／老老世帯で生活をしてみえるのです。

鈴鹿市の人口ピラミッド 参考までに、鈴鹿市発表の人口ピラミッドの説明文を引用しておきます。「団塊の世代」とは終戦直後の昭和22年前後に生まれた人口爆発の時代の方たち。次いで昭和50年前後に生まれた団塊の世代の子供さん達が「団塊ジュニア世代」。当然、人口が多い年齢層ですが、問題はそこから人口減少がはじまっていたことです。その結果、「団塊」のみなさんの

高齢化に加えて、「団塊ジュニア世代のジュニア」の少子化が常態化してきて、今の少子高齢化に至っていることです。

暮らしまかせて支援事業 みんなの協力で住みよい環境にもっていくため、鈴鹿市の長寿社会課の支援を受けて、鈴鹿市社会福祉協議会が対応策のひとつとして「暮らしまかせて支援事業」の、各地域での立ち上げに取り組んでいます（市内28地区のうち、すでに11地区ではこの支援事業が進行しているそうです）。

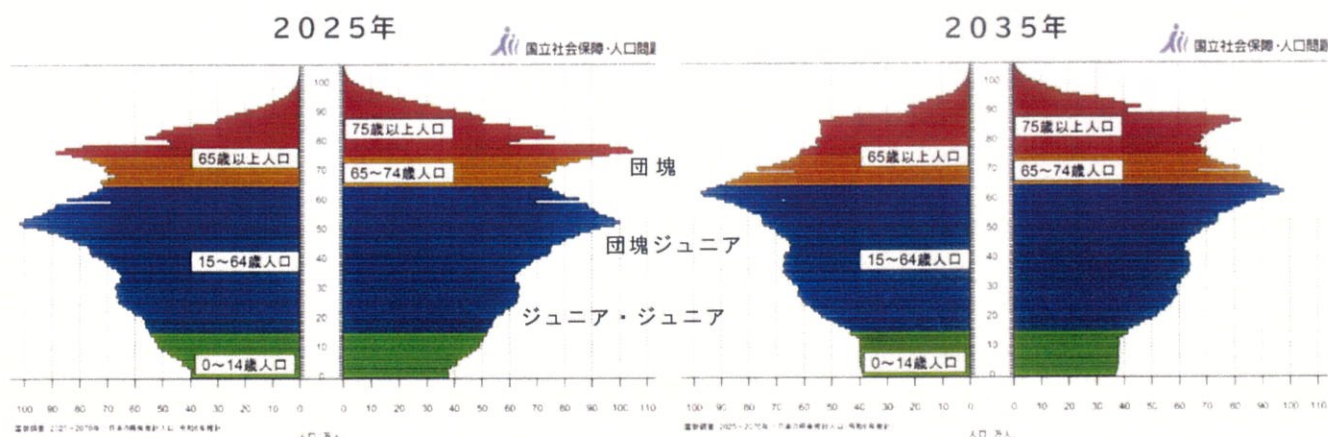
事業目的 説明会で配布された資料によれば、支援事業の目的は、

高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられるよう地域の互助の活動を充実させるため、地域住民が主体的に運営する介護予防活動やお互いに見守り合うことのできる場づくり、また、そこで把握された地域課題に取り組む支え合い活動を支援する

協議会が行う活動 上記の事業目的にあるとおり、市が協議会に期待する活動事業は、次の2つの地域内互助・共助活動です。

- ①**通いの場、交流の場の開設** 地域の方々が通い合うことができ、お互いに見守り合えるようになれる場を設けること、老若不問。
- ②**生活支援** 高齢者層の方々の抱える小さな依頼事、ささやかな困りごとに地域づくり協議会から派遣する支援員（ボランティア）が、寄り添って手助けする組織をつくること。ただし、依頼する内容によっては実費をボランティアさんに支払う。有償とするのは依頼

■ 人口構成（これから）



者側に、遠慮やら恐縮のあまり、次が頼みにくくなる事態が生じる、などの想定外のことを回避するためです。

交流の場の具体例 ご近所ママのつどい、転入ママの集い、プレママの集い、高齢者サロン、子育てサロン、等々

生活支援の具体例 ゴミ出し、電球の交換、家具の移動、話し相手、庭木の剪定、除草作業、病院への付き添い、買い物の付き添い、外出の付き添い、買い物代行、屋内清掃、等々。

以上、事業具体化の際には皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

養成講座」が開催されました。午前10時開講、午後3時修了の濃密な勉強会でした。

定義 はじめて耳にする言葉ですが、災害ボランティア・コーディネーターとは「災害時に被災者と全国各地からのボランティアをつなぐ役割を担う方」、volunteer coordinator のことです。

目的 講座の目的は、河曲地区における地域防災について広く知り、河曲地区における防災意識を高め、災害時には被災者と全国各地からのボランティアをつなぐ役割を担う人材の養成、ということでした。

防災ボランティア・コーディネーター養成講座

地域の 受援力 を高める

防災コーディネーター養成講座

河曲公民館で7月3日、鈴鹿市社会福祉協議会の主催、鈴鹿市防災危機管理課と鈴鹿市災害ボランティア・コーディネーターズのみなさんの協力により、「災害ボランティア・コーディネーター

受援力を高める 全国からのボランティアの方々を災害地の河曲で円滑に受け入れるための環境整備や知恵の集積を《受援力》と言うそうです。今回の講習での大きな知見は、

一日も早い復興のために、地域外のボランティアの力をうまく引き出す力をつけておくことが、被災地河曲の復旧をはやめ、結果として、河曲の地域防災力を高めることにつながる

という「受援力」の重要性を知ったことです。全国から駆けつけて下さる方々に、その力を最大限に発揮してもらえるよう、被災地の河曲が受援力をできるだけ高めておく事が肝要です。

仲介 それなりの受援力、できれば高い受援力



を備えておけば、私達河曲の被災者個々のニーズを、お助け隊の皆さんにうまく繋ぐことができます。復旧、復興も早まります。

災害ボランティアセンターの開設 地震や豪雨などで大きな被害がでた場合、鈴鹿市ではホンダアクティブランドに本部センターが開設されます。同時に、スズカメディアパーク、鈴鹿大学、鈴鹿医療科学大学、鈴鹿地域職業訓練センターの4カ所にサテライト施設が立ち上がる計画です。河曲地区は鈴鹿医療科学大学サテライトのもとにおかれます。

職員と仕事 災害ボランティアセンターの職員には福祉協議会職員、コーディネーター、関係団体派遣職員、一般ボランティアの方が専従になります。

仕事は2方面にわたっていて、まず、各地からのボランティアの募集と受付を行います。併行して被災者からの作業依頼や要望、困りごと等を調べておきます。そのうえで、ボランティアの方に依頼要望事項を紹介し、了解が得られたら、つまりマッチングがうまくいけば、そのボランティアを現場へ派遣します。センターの最も重要な仕事は、このマッチングです（下図を参照）。

ボランティアセンター、8つの活動の流れ

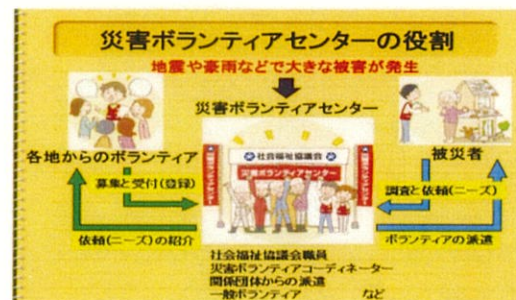
1. 被災者からの困りごと、依頼案件の受付
2. ボランティア受付、活動保険加入手続き
3. オリエンテーション、活動上の留意事項周知
4. マッチング、参加したい活動先の選択
5. グループング、作業リーダーを決め、依頼内容の詳細を把握

6. 資材の貸し出し、ボランティアの送迎
7. 救援活動 被災者に「寄り添う」という気持ちをもって福祉救援活動に従事
8. 活動報告 リーダーは活動状況と活動継続の有無をセンタースタッフに報告

共助 自助、共助といいますが、外部からの力をうまく現場に導入するノウハウ、知恵の陶冶も共助の一環です。今回の講習会には民生児童委員と地域づくりの関係者が参加しましたが、地域を一番詳しく知っている関係者の方々の共助が、事業推進には不可欠との感想を持ちました。

発災直後は地元ボランティアで 南海トラフ地震が起これば被害は甚大で、市外県外からのボランティアは望めません。地元で被害の少なかった所が、被害の大きかった所を支援する。これが第一歩です。

がれき撤去や家財の搬出など、復旧にむけた力仕事はまず地元ボランティアの出番です。地元をよく知っているからこそその情報収集が可能です。行政職員も被災しています、被災者支援拠点としての避難所運営も地元パワーが不可欠です。さらに災害ボランティアセンターやサテライト施設の運営のための人手や資機材不足など、地元パワーの運営協力があればなんとか凌げます。



① ニーズ受付



② ボランティア受付



③ オリエンテーション



④ マッチング



⑧ 活動報告



⑦ 救援活動



⑥ 資材の貸し出し・送迎



⑤ グループング



浜松市防災学習センター、 航空自衛隊広報館を見学

自治会総代会・地域づくり合同視察見学会

自治会総代会と地域づくり合同で、7月8日、浜松市にある「浜松市防災学習センター」と航空自衛隊浜松基地に付属する「エアーパーク 航空自衛隊広報館」の視察見学に行ってきました。

ピアノとオートバイの町、というイメージしか持ち合わせていませんでしたが、写真にあるとおり、学習センターで浜松市の地勢の概要説明を受けていると、そこが鈴鹿市とかなり似ていることに驚きました。

鈴鹿市は西に滋賀県と県境をなす鈴鹿山脈があり、浜松市は北に長野県と県境をなす赤石山脈があり、山脈から鈴鹿川が東に流れ始まって平野にでると右岸が鈴鹿市で左岸が四日市市、山脈から天竜川が南に流れ始まって平野にでると右岸が浜松市で左岸も浜松市、ですが最後に鈴鹿川は伊勢湾にそそぎ、天竜川は遠州灘にそそぐ。

地勢的な相似を知って、センターでの現況説明は我がコトとして聞きました。時に見学先は超先進的な施設での学習を選択しがちですが、今回は今後ともお互いに学び合える環境にある、と思ひ至りました。

エアーパークでは、最近の大国のエゴを前にしてスクランブル体勢にあるのは自衛隊、国内の自然災害時にヘリコプター救助に飛んできてもらえるのも自衛隊、とその存在の重さに改めて思い至りました。

実りある二施設の研修でした。



夏休みラジオ体操 参加者 603名

夏休みラジオ体操 7月29日と8月5日の土曜日、続けて2回、河曲小学校の学校運営協議会主催、地域づくり協議会共催の「ラジオ体操」の集まりがありました。

参加者は7月29日331名、8月7日272名、合計603名、小学生が中心ですが、先生方も参加されていて、幼児から中学生、高齢者まで、みなさん、爽やかな動きでした。



会員総出で「草刈り」 これも「受援力」アップの場

地域づくり会員総出で「草刈り」

午前中すでに30℃を越えていた7月22日、年間計画事業のひとつ、考古博物館の広場整備と神戸中学校及び河曲小学校の校庭周辺の草刈りを地域づくりの会員の皆さんで行いました。

チームワークという点で、こうした汗をかく作業をみんなで一緒に行うことから得られるものは多大です。お互いに知りあいならば緊急時の互助・共助の体勢づくりに手間どりません。本誌4頁に「受援力」のことをお伝えしました。日常の場でネットワークが構築してあれば、援助を受ける際に手際よく構えることができます。



鈴鹿市上下水道局 河田送水場



サテライト型防災訓練 11月5日 非常用飲料水の確保

非常用飲料水の受給配給訓練

河曲地区サテライト型防災訓練が11月5日に行われます。当日、河曲地区16自治会ではそれぞれ地元の課題に見合う訓練が予定されていますが、今回は同時並行して、河曲地区一斉で行う新たな統一プログラムとして「非常用飲料水の受給と配給訓練」を実施することとしました。

災害地の状況を伝えるニュースなどでは、当該

被災地区に行政側から給水車が出向き、そこで各自持参の容器に水をもらって帰る、という「公助型」の現場が報道されます。

自助型給水ラインの構築

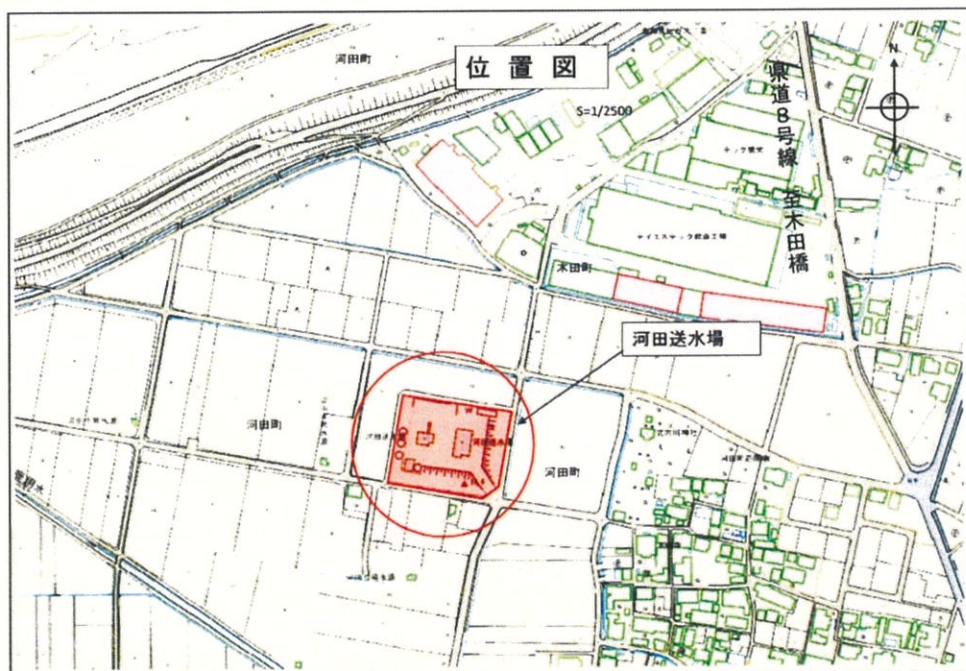
今回、河曲で計画している訓練はこれとは異なり「自助型」を指向します。今回は、河曲では初めての試みですが、地図にあるとおり、地元の河田町の式内川神社の西にある鈴鹿市上下水道局の河田送水場に、各自治会の代表者2名が出向いて、そこで相当量の水を受け取り、ついで各自治会に持ち帰り、避難所で待つ会員の皆さんに配給する「自助型給水ラインの構築」を実体験しようとするものです。

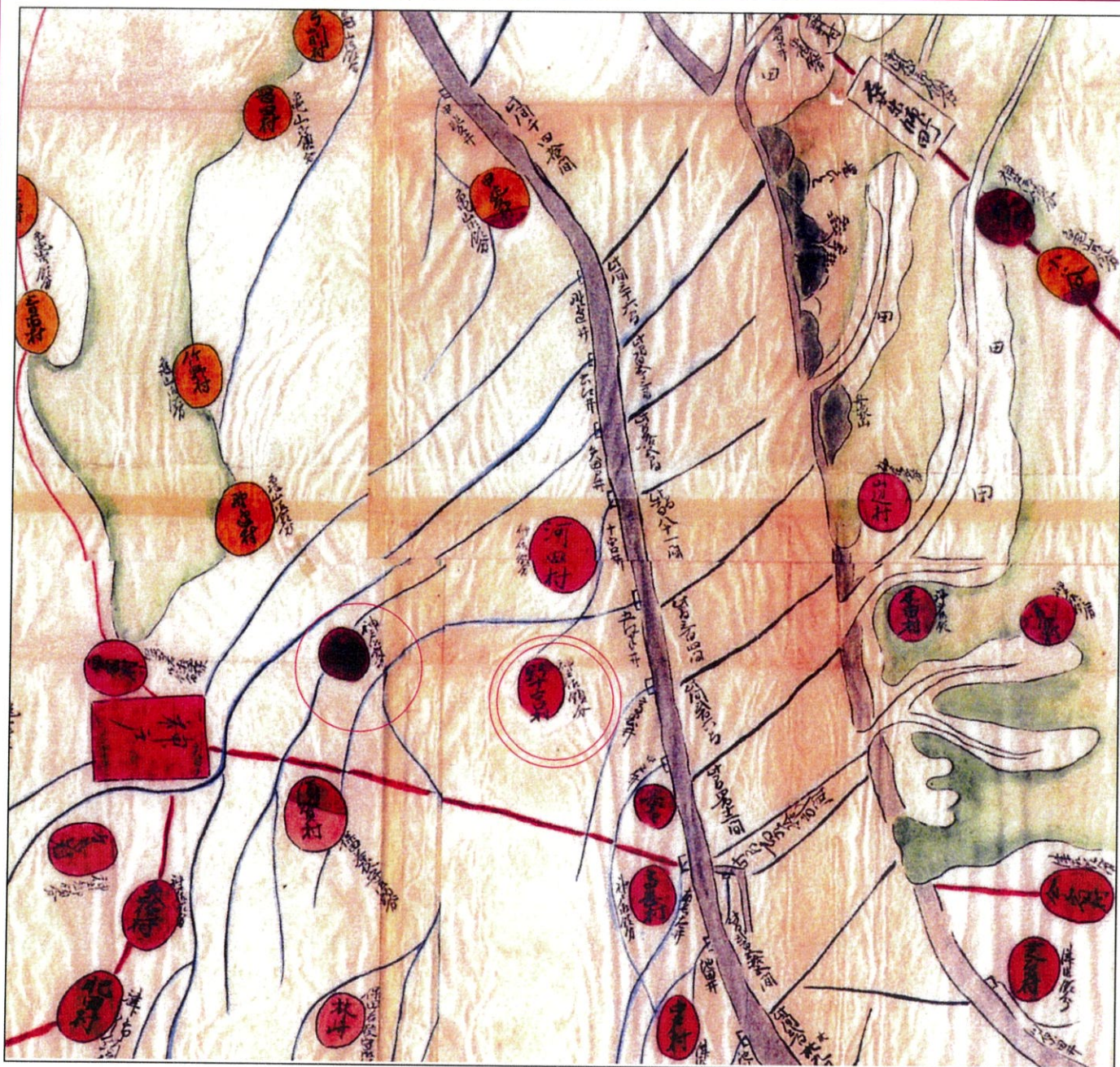
地図は大きく掲載しておきます。いつか緊急時にここへ自力で来れば水が確保できる、その現場

が確認できると思います。当日はサテライト各避難所宛に、6リットル入りの折り畳み式ポリ容器がサンプルとして少しづつ配られるそうです。

河田送水場

送水場は南北に走る県道8号線の西にあります。コンクリ建屋の奥に見えるタンクが貯水槽で、当日はここでの受給になります。





万治三年、新十宮村が発足

(西暦1660年)

寛文の頃の絵図に見る河曲周辺

十宮村の「村越し」1660年

写真の絵図は令和5年(2023)から360年前の寛文3年(1663)に描かれた河曲周辺の農業用水路を示す絵図の一部です。

四角い神戸町を基準にすると、大谷を含めて河曲8地区が読み取れると思います。注目は、二重丸で囲んだ村の名前が「新十宮村」、一重丸で読みにくいのが「十宮村」となっていることです。

この十宮村の場所は今の神戸中学の跡地、つまり本誌1頁で紹介した、数十戸の宅地が生まれよ

うとしている新しい町域周辺にあたります。

万治3年(1660)、神戸の殿様になりたての石川総良公が十宮村の住民に、鈴鹿川の堤防をしっかりと守れるよう、村あげて少し北に引っ越しをせよと「村越し」を命じました。

この村越し命令から3年後の姿がこの絵図です。引っ越した村は「新十宮村」と近隣では認識されていたことが判ります。しかし時を経て「新十宮村」は十宮村に落ち着き、「十宮村」は村人から「古屋敷」と呼ばれるようになります。村の故郷と受け止められていたようです。

河曲地区地域づくり協議会広報紙

『広報かわの』第14号 令和5年9月20日 発行
発行責任者 河曲地区地域づくり協議会 事務局長
事務局 河曲公民館内「地域部屋」 電059-390-1295